完了報告書（平成 22 年度）

提出者　猪股　祐介
提出年月日　平成 23 年 4 月 3 日

【プロジェクト名】

和文　**満洲移民における引揚げと親密圏の再編成―戦後日本社会への再定着を中心に**

英文　The Repatriation and Reconstruction of the Intimate Spheres of Manchurian Settlers: On the Social Reintegration of Manchurian Settlers into Postwar Japan

【メンバー構成】

研究代表者　猪股祐介
幹事
メンバー

【ねらいと目的】（600 字程度）

本研究の目的は、満洲移民が引揚げ、日本社会へ再定着する過程でその親密圏が再編成されたこと、それが 1945-1950 年代の満洲移民言説を強く規定したことを明らかにすることである。具体的には次の三つの作業を行う。

第一に、満洲移民の手記・体験記等をもとに、引揚以後 50 年代までの満洲移民を取り巻く家族、開拓団、地域社会の状況を把握する。第二に、引揚者援護や戦後開拓が、満洲移民引揚者と家族、地域社会との社会関係を変えたこと、また旧開拓団の再集団化をもたらしたことを明らかにする。1950 年代の引揚者援護と戦後開拓、旧開拓団の親睦団体、拓友会について、長野県や岐阜県で文献調査を行う。第三に、満洲移民における親密圏の再編成が、満洲移民言説における「被害者意識の肥大化」をもたらしたことを明らかにする。特に、満洲移民言説に表れた家族意識、郷土意識、開拓団意識に着目する。

本研究は、満洲移民の引揚後の家族、旧開拓団（拓友会）、地域社会等の親密圏の変容と満洲移民言説を生産する公共圏の変容との相関関係を明らかにすることを通して、親密圏と公共圏の再編成を考察するものである。

【活動の記録】

・調査
7 月 22、28 日　猪股祐介　岐阜県郡上市、郡上藩凌霜隊講演会の参与観察
7 月 28 日、猪股祐介、岐阜県郡上市、凌霜塾元塾生福手豊丸へのインタビュー
8 月 27、28 日　猪股祐介、長野県阿智村、満蒙開拓歴史展・シンポジウムの参与観察
1 月 14－16 日、3 月 17－19 日、猪股祐介、東京都千代田区、国立国会図書館にて満洲開拓団史に関する文献調査。
京都大学図書館、東京大学図書館にて随時文献調査を行う。
・学会発表
11 月 7 日、猪股祐介、日本社会学会第 83 回大会、「満洲移民経験者の語りの登場－1950 年代『開拓団史』を中心に」

【成果の概要】（800 字程度）

研究のねらいと目的に沿って、満洲移民体験者が 1950 年代に刊行した、開拓団が主体となって編纂された『開拓団史』に着目し、それらを収集・分析した。また、長野県の拓友会のイベントに参加した。

1950 年代の『開拓団史』については以下の三つのことを明らかにした。

①1950 年代に入り、満洲移民経験者によって『開拓団史』が書かれた。それは、引揚犠牲者の七回忌や十三回忌に合わせて出版された。慰霊祭は、開拓団を地域社会という公共圏において想起する契機となったと同時に、『開拓団史』という満洲移民言説の形成を促した。

②『開拓団史』はその主な内容によって、「引揚状況の記録」と「（満洲における）開拓団建設の記録」の二つの類型に分けられる。前者では、引揚げの犠牲を乗り越えて、引揚後生活再建を遂げたことが、後者では、開拓団での成功が引揚後の再定着に生かされたことが、強調される。

③『開拓団史』の刊行や慰霊祭を通して、旧開拓団は拓友会として再集団化するとともに、地域社会における「満洲移民」に対する「正当な」評価を求め始めた。これに対して、地元自治体は送出母体として一定の理解を示したが、その際「引揚犠牲者の慰霊」の側面のみが受容された。

このように、満洲移民の満洲経験は、1950 年代、慰霊祭や『開拓団史』を通して、家族という親密圏から、徐々に地域社会という公共圏へと開かれていった。そこには「引揚状況」のみならず「開拓団建設」も含まれていたが、地域社会では前者の文脈が強く作用した。なお、現在も活動を続ける拓友会は、従来の慰霊中心の満洲経験の語りを見直し、現地住民に対する加害も含む歴史的事実として捉え直そうとしている。イベントや記念館建設等を通して、公共圏に対する発信も試みている。

【通信欄】

※写真のキャプション

完了報告書写真 1（猪股祐介）：岐阜県郡上市の満洲開拓団慰霊碑

完了報告書写真 2（猪股祐介）：長野県阿智村の満蒙開拓歴史展の様子

（研究代表者記入）

プロジェクト	□次世代ユニット	
経費	予算額　350(千円)	実績額　350（千円）